

Otona

おとなプラス

創刊0号

10月14日(金)2016年

新潟日報

大地に踏ん張り、石を彫る



本日の案内人
野沢 達雄
(論説編集委員)

隣の席で社説を書くN記者の、屋めしは大抵おにぎりである。サイズはソフトボールほどだ。その体格にふさわしく、でかい。

実家は農家。農繁期には決まって手伝いに行くという。
土と向き合う楽しさも、あるいはつらさも知っているからだろう。Nの原稿には日なたの匂いがする。
気が付いた。人間、地面から足が離れすぎると、頭も心も干からびる。
新聞社のビルに閉じこもってばかりでは原稿に血も通うまい。
2年ほど前だったか。コラムを書くのに四苦八苦していたら、携帯電話が鳴った。

阿賀野市(旧笹神村)のコメ農家、荻野弘一(62)＝写真左＝である。
「もしもーし。今からドジョウを持っていく。用事のついでだから」
雨の後の田んぼでは、ドジョウがたくさん捕れると聞いた。そういえば、前夜はザンザン降りだった。
妻の理恵子(66)＝写真右＝と二人三脚、知恵と手間を注ぎ込んでいる田んぼである。ミミズやタニシもさぞかし元気に違いない。
丸々太り、バケツでピョンピョンはね

る獲物は柳川鍋に変身。千ばつ気味のわが脳ミソの肥料になった記憶がある。
実は、夫妻の田んぼが生み出すのはコメとドジョウだけではない。
大地に踏ん張る二人が創るのは、野外に映える大きな石彫作品群である。
伸びやかでおおらか。見る者を包み込むーと私は感じる。
海外では「コイイチ・オキノ」と知られるその人の、「耕作」と「創作」の現場には、稲わらの香りが満ちていた。

(文中敬称略)

写真は本社写真部・野上貴

夕刊が11月1日、「おとなプラス」に進化。全県にお届けします